人間科学研究所所長挨拶

港道　隆

研究所の所長を仰せつかっております港道と申します。本日は連休の最終日でありながらたくさんの方々にお集まりいただいて、心からお礼申し上げます。

甲南大学の人間科学研究所は文部科学省の助成を受けて、二〇〇八年から甲南大学内外の研究者たちが参加する研究活動を行なってまいりました。その一環として、二〇〇九年には子ども時代の戦争体験を問題にする、昨年二〇一〇年には育児が直面するもろもろの困難を考える公開シンポジウムを開催しました。そして本年、三回目の公開シンポジウムを迎えることになりました。テーマは既に申し上げたとおりです。

日本の社会だけではありませんけれども、われわれが抱える心の問題を改善する心理療法の一ジャンルに、芸術療法と言われるものが存在しています。その一方には学問的かつアカデミックな芸術の研究者たちがおりまして、従来はこの二つの領域が何の関連もなく活動を続けてきました。今回、われわれ研究所は芸術学と芸術療法というテーマを掲げて、深い溝があると思われていた二つの分野を横断しつつ、新たな問題提起ができないか模索してまいりました。それはおそらく日本のみならず、世界的に見ても初めての試みだと思います。実際さまざまな研究者にお集まりいただいて、何度も研究会を重ねて討論してきました。そのたびに新たな困難に直面するということを続け今日にいたっています。それはしかし、その分だけいかに独創的な試みであるかということの証左でもあるわけです。

その継続的な努力の中から、今回のシンポジウムを開催するまでにこぎ着けたというのが、参加してくださった研究者の方々の実感であろうと思います。私としてもこぎ着けられたことを心から喜んでいる次第です。この壇上からお話しくださる三人の方々以外にも、今日は研究活動に参加していただいている方々が会場にいらっしゃいます。その方々を含めまして、一般参加の方々の積極的な発言もいただいて、この場が濃密な時間、空間になることを心から望んでいます。

あと一つお知らせを。二年前に開催した子どもの戦争体験と昨年シンポジウムの育児問題に関しては、その研究成果はそれぞれ本の形で、来年明けに平凡社から出版する準備をしています。今回のシンポジウムを含めまして、芸術と芸術療法に関しては再来年、年明けに一冊の本となって出版されることになっています。購入していただければそれに越したことはありませんが、図書館から借り受けるという形でも、ぜひお読みくださ

ればありがたいと思います。

さらに、子どもの戦争体験のテーマに関しまして、来月一〇月二三日、これもまた日曜日でありますが、ドイツ・ミュンヘンのミヒャエル・エルマンさんという研究者をお招きして、文学部主催で公開シンポジウム『戦争を生きた子どもたち――ドイツと日本の経験から』を開催いたします。そちらにもぜひ参加していただければ幸いです。

既にご覧になってくださっている方も多いと思いますが、今日は、入り口の外にある高村智恵子の紙絵展示とタイアップした議論を展開する所存です。ロビーの展示もご覧下さい。

今回のシンポジウム開催に関しましては、この会場を貸してくださった甲南大学はもちろんのこと、研究所に属する若手の研究員の方々およびボランティアをしてくださっている学部、大学院の学生さんたちの協力にお礼を申し上げます。この集まりが研究者としての参加者にも、その他一般の方々にも、今日来てよかったと思ってお帰りいただけるか否かは、これから司会をしてくださる甲南大学の川田都樹子さん、および後半の司会をしてくださる西欣也君の技量にかかっている、そういうプレッシャーをかけまして、私の挨拶といたします。ありがとうございました。